

解釈学習を適用した韓国史授業の開発

－ 靑島遺跡の犬を事例にして－

朴 在 英*

はじめに

歴史教育の目標の一つは「歴史的思考力の伸長」である。韓国でも1990年代に入り歴史的思考力に関する研究も活発に行われ、様々な議論がなされてきた。これらの議論は学習モデルと評価方法の開発研究にも繋がり、教育委員会レベルでも「教室での授業改善」という名目で生徒の思考を刺激する授業形態への変化を図っている。しかし、実際の現場での授業の変化は容易ではない。教師の問題だけでなく、大量の学習内容、限られた授業時間数、大学修学能力試験（日本の大学センター試験に相当）への配慮が必要という制度的な問題がある。加えて、客観的評価を強調する傾向が強く、思考の変化を確認できる質的評価ではなく、知識の有無を判断する量的評価に偏るなど社会的な問題もあり、これらは複合的に絡み合っている。韓国ではこうした多くの困難を現場は抱えているが、歴史授業は変化を求められている。この情報化社会で、学習者には歴史的知識を獲得するだけにとどまらず、それを比較・分析・判断する高度な思考活動を含む授業が必要である。このように考えると、解釈学習は学習者の歴史的思考力を促進する一つの代案になる。

解釈学習とは、過去に起きた事件・事項について、学習者一人ひとりが関連資料を比較・分析しながら、自分の知識と経験に基づいて事件を再構成し、意味付けて、最も適切な解釈が何なのかを判断する学習である（戸田2006）。このような学習過程は、歴史学界で歴史学者が使う仮説設定から「史実」形成までの過程を反映することで、歴史学者の思考過程を体験することができるという点に特徴がある。これまでの韓国における歴史授業は教科書に記述されている学界の通説を教えたり、その通説に対する教師の考えを加えたりすることで終わらせる場合がほとんどである。一方、解釈学習は学習者が他人の解釈を受動的に受け入れる状況から脱して、能動的で積極的に解釈過程に参加する点で大きな意味がある。学習者は歴史的資料を基に仮説を提示し、他説と議論し、最も妥当な解釈を探していく過程を体験する。その中で、資料の比較と分析能力が向上し、当時を生きた人々や出来事、時代的背景の理解が深くなり、論理的な思考に基づいた判断に至る思考力を養うことができる（寺尾2005）。

解釈学習について、日本では加藤公明が自身の解釈授業の理論や授業実践を論じており（加藤1991、

2000, 2015）、加藤の研究を総合的に検討する書籍も刊行されている（加藤・和田2012）。これ以外にも、解釈学習については児玉康弘の理論と実践（児玉2005）や原田智仁（原田2009）、土屋武志（土屋2015, 2016）などの研究がある。韓国においても、権五鉉が加藤公明の授業を主体的な歴史認識を形成する討論授業として紹介している（権2013ab）。しかし、韓国史の題材を使い、生徒の歴史認識の変容にまで踏み込んだ実践は韓国で見ることができない。そこで本稿は、加藤公明を授業モデルとして韓国史の内容による授業を開発し、学習者の思考活動の変遷を明らかにすることを目的とする。

1. 加藤公明の解釈授業

解釈授業の必要性や内容、方法については前述したように多くの論者によってすでに説明されており、本稿ではその繰り返しを避けるために、加藤実践を中心にその骨子を述べる。本稿で加藤に着目するのは、その実践においては学習の主体は学習者であり、歴史認識の主体として活動できる多様な解釈授業を構成しようとしたところにある。他の解釈授業とは異なり、加藤は生徒に多様な解釈を引き出すために、生徒の自由な解釈を保障している点が特長として挙げられる。そのために生徒が持っている歴史的な通念や常識を否定したり動揺させたりする段階を授業初めに設定している。「いったい、なぜそうなのか」の疑問を生徒たちに持たせ、生徒自らその答えを探させることである。生徒各自の答えにとどまらず、その答えをクラスの他の生徒と相互批判する過程で、生徒は学問的で総合的な歴史認識を育成することができる。加藤は自らが考えた解釈授業を討論方式によって4つに類型化している。

<表1 加藤の4つの討論授業方式>

全員による直接討論	類型1	一人の意見を発表させ、賛否を話す討論
	類型2	複数の意見を発表させ、賛否を話す討論
班別討論	類型3	個人意見を作成した後、同じ意見の人同士で班を組んで、他班と討論
	類型4	席が近い人同士で班を組んで、班の意見を作り他班と討論

出典：加藤公明（2000）『日本史討論授業のすすめ方』日本書籍，45頁

*大邱商苑高等学校

共通点は次の3点である。1点目は授業導入部分で生徒の興味を誘発し、個人の知識と経験に基づいて独創的な仮説を設定できる教材と発問を用いることである。2点目は生徒各自が仮説を構築する個別学習過程と、個人の仮説を批判的に判断して修正できるクラス議論過程が含まれていることである。3点目は討論後も結果レポートや感想文、教師や生徒の意見及び配布などで歴史認識を発展させる。本研究では上記を用いることにし、次節では教材となる韓国の靑島遺跡を説明する。

2. 靑島遺跡¹⁾について

(1) 遺跡の構成

靑島は行政区域では慶尚南道泗川市靑島洞に該当し、長さ970m、幅720m、面積46haの小さな島である。1998年(財)三江文化財研究院(A地区)、釜山大学校博物館(B地区)、東亜大学校博物館(C地区)によって本格的な発掘調査が行われた。

島の南側には海拔90mの大島山、北には標高60mの小島山と呼ばれる峰が形成されている。二峰の間には緩やかな傾斜面で村や耕作地に活用され、東と西に小さな湾があり、港に活用されている。遺跡は貝塚、住居・建物地、堅穴と墓等で構成されている。

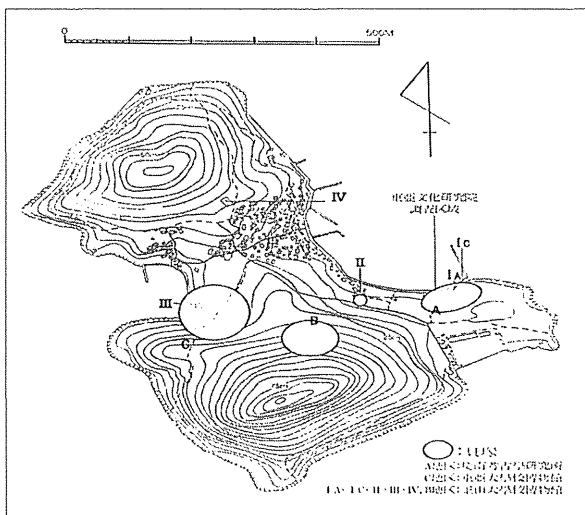


図1 靑島遺跡現況図

貝塚は、島全体に貝殻が散在していて最下層では新石器時代の文化層も確認され、墓や住居地、一部は工房地が形成されたところもある。AとC地区の貝塚は、住居生活で出てきた貝殻や様々な完型の器物が含まれている廃棄場の性格がある。また、住居・建物地は、島全体の緩やかな斜面に分布し、重複による破壊が激しい。円形系と長方形系に区分され、重複関係から見ると長方形系が時期的に早いですが、数的には円形系が多い。多数のオンドル住居地も確認されていて、特

殊な用途施設と推定される建物地もある。墓については、A地区の北端の海岸段丘の急傾斜面に集中的に造成されており、B・C地区の貝塚でも貝の山の中に死体を埋めた人骨が出土した。大人や小児は主に土壙墓を使用し、幼児は甕棺墓を使用した。土壙墓は単に穴を掘って遺体を埋めたものがほとんどであり、人骨の遺体が色々な埋葬姿勢を見せるのが特徴である。靑島で人が住み始めたのは新世紀時代以後だが、大規模な遺跡を形成した中心時期は三角形粘土帯土器²⁾を標識とする時期である。したがってこの時期を韓国では「靑島期」と呼ぶこともある。靑島期の年代推定は学者間で若干の差があるが、出土土器などで見ると紀元前2C～紀元後1C程度と推測できる。また三角形粘土帯土器を中心にする紀元前1Cが最盛期であると判断できる。

靑島遺跡では三角形粘土帯土器をはじめに後期無文土器、石器、骨角器などの遺物と一緒に半両銭、五銖銭、漢鏡、楽浪系土器などの中国・楽浪系遺物、弥生系土器などの日系遺物が出土した。靑島から出土した外来系遺物は「靑島期」と推測している紀元前2Cから紀元後1Cの時期と対応する。また各地域で発見された遺物により推測した遺物の交易の流れと鉄器の需要が高まり始めた時代状況を考慮すると、その時点で靑島が中国(楽浪) - 朝鮮半島南部(三韓、済州島など) - 日本(弥生時代)交易の中間経由地であり、中継貿易地の役割をしたと推測することができる。靑島中心交流の開始については時期を断定するのが難しいが、紀元前2C～紀元後1Cを中心に繁栄したのは確かである。朝鮮半島南部に鉄器文化が活発になり、弁韓・辰韓の鉄を購入するために南海岸の諸勢力と日本の積極的な交易が行われ、楽浪と朝鮮半島南部・日本がお互い交易のために南海を経て北に航海し、そのハブには靑島があった。しかし靑島遺跡は紀元後2C頃から急激に衰退する。靑島が衰退した原因には色々な意見がある。鉄を中心に成長した金海地域で交易の主導権が移ったという意見、靑島ではなく新たな交易拠点ができたという意見、伝染病の流行が原因という意見である。

(2) 靑島人の生き方

食生活は、靑島で穀物資源の採集や狩猟に関する遺物の出土量はごく少数に過ぎない反面、漁労活動と関連するツールの出土量は比較的多い。これは穀物と動物資源を外部から搬入し、魚介類の資源は自給していた状況を示す。靑島遺跡の貝塚から当時靑島人の食べ物について推測できる。貝類は、全体的にはカキが全体の60%程度に多数を占めており、その他の様々な貝類が食べられたことが把握されている。動物の骨の場

合、5000個弱に当たる陸上哺乳類と海洋哺乳類資料が確認され、その中に鹿は全陸上哺乳類動物の83.5%を占めるほど圧倒的であった。勒島のような小さな島でこのように多くの鹿が生息することは難しいので、多くの研究者は鹿を外部から搬入したものと推定している。魚類の骨は全12種100個弱が出土した。ボラなどの出土量を合わせると全体の70%程度を占めており、他にも様々な魚を食べたと思われる。植物材料は穀物の圧痕と炭化米3点が報告されているが、これは当時の生活経済に穀物資源が占める割合がほとんどなかったことを示すものである。

祭祀と祭儀について、勒島は小さな島々に囲まれ非常に高速な潮流が流れており、既存の海洋祭祀遺跡の立地条件と類似している。勒島でも祭儀行為に使用されたと推定される小型土器と代表的な古い遺物である占い骨が多数確認され、多様な祭儀行為が行われたよ

うである。勒島での古い骨はほとんど鹿や豚の肩甲骨を利用した。

(3) 勒島遺跡の埋葬犬骨

勒島遺跡ではほぼすべての発掘調査地域で犬の埋葬が確認された。特にC地区と進入路開設区間では犬を意図的に埋めた様子が多数確認され、人骨が埋葬された墓内または周辺で犬の埋葬が発見された場合が多く注目される。勒島遺跡C地区のナ区域での40×30m²範囲内で26個以上の埋葬人骨と共に28個以上の埋葬犬が出土した。また、同一地点の堆積層内で多数の犬の埋葬が散発的に発見され、これも元は埋葬された犬が後代に層位が攪乱され散らばっていたと推定される。これらの骨はシカやイノシシかに見られる解体した跡が観察されず、食用された後に捨てられたものではない。

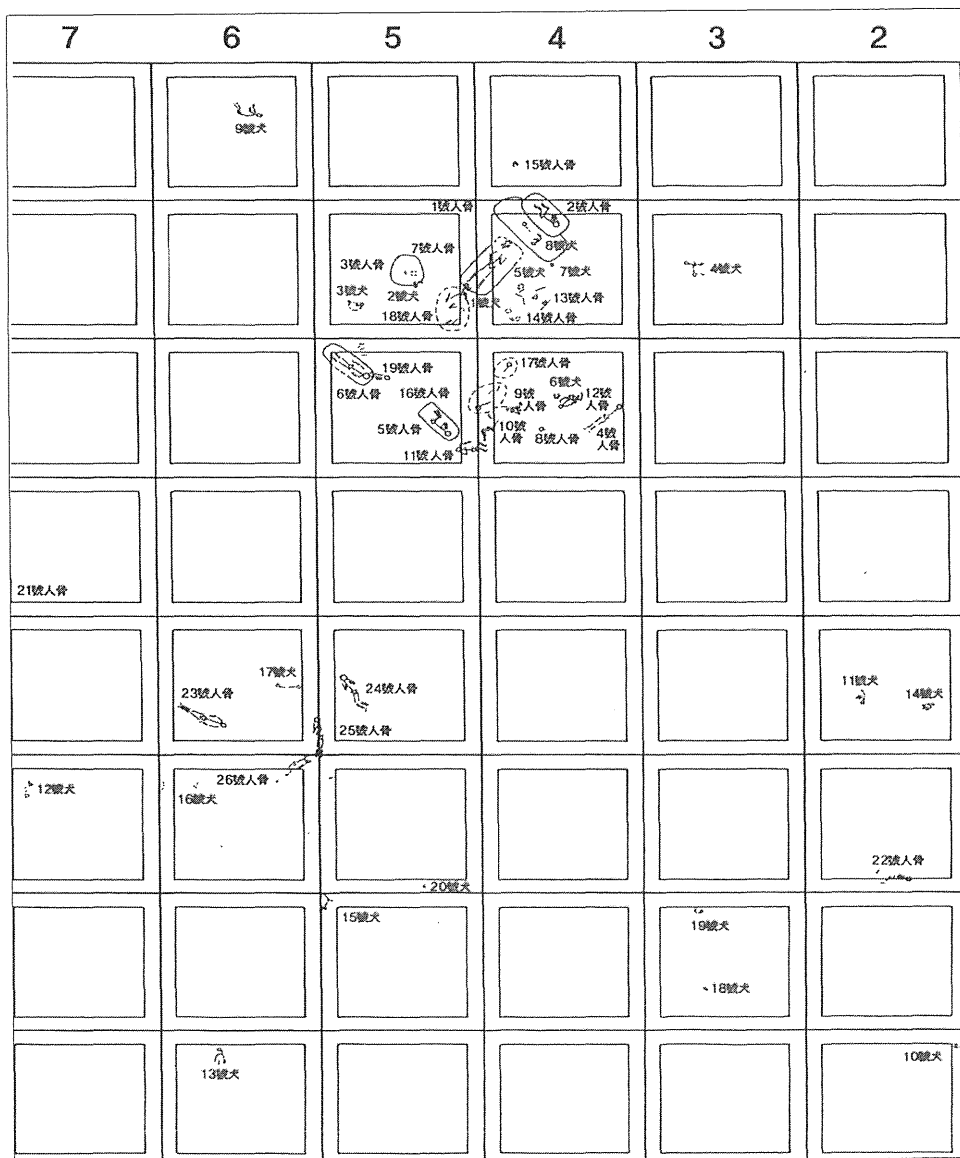


図2 勒島遺跡C地区 埋葬犬配置(1/200)

出典：東亜大学校博物館(2008)『泗川勒島C2』239頁

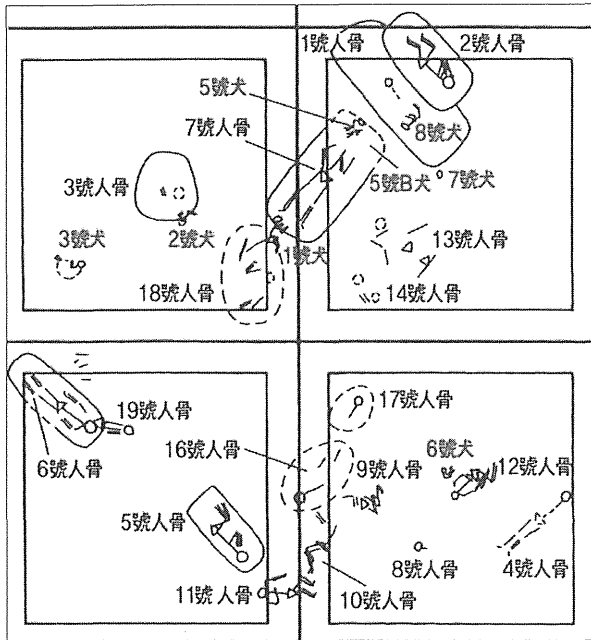


図3 勒島遺跡C地区埋葬犬配置拡大図

表2 埋葬犬出土位置及び特徴³⁾

区分	埋葬犬	特徴
人間の墓地内で、墓の内部で一緒に安置されたか周辺に安置	人間の墓地内 1, 2, 3, 5, 5B, 6, 7, 8, 16, 17号犬	6号犬を除いて皆の成人したオス
	人間の墓地の周辺 4, 9, 12号犬	
犬の墓地と言える区域内で安置	10, 11, 13, 14, 15, 18, 19, 20号犬	メス2個体と生後1年に満たない子犬の4個体を含む

出典：李俊貞（2013）「韓半島の遺跡出土飼育種犬の活用様相」，13～14頁

3. 授業結果および学生の思考分析

(1) 授業結果

授業実践は関東圏にある地方国立大学のA大学で行った。大学で行ったのは、次の2つの理由からである。1つ目は、高校生よりも大学生は知識や経験が多いため、認識変化がより明確ではないかと考えたためである。2つ目は、資料を多用するために、高校でも授業ができるかを検討する予備授業の意味を持たせたからである。社会科教職の授業を受けている主に歴史学や教育学専攻の大学生約30名を対象とし、2017年11月22・27日に75分の授業を2回行った。授業で提示した教材は、前節の勒島遺跡に関する図や表などの資料である。授業1回目は、問題提示→背景知識説明→仮説設定→班づくり→班別協議を行なった。2回目は各班の整理プリント配布→班別協議→班別発表→自由討論→仮説投票→個人の意見整理という流れで進化した。本授業では「人と一緒にの墓場で埋葬されたこれらの犬の役割は何だったのだろうか」という発問を用いた。また資料は、勒島遺跡自体についての説明、勒島C地区で出土した犬について説明している。1時間目

勒島C地区の場合堆積層の性格上、墓墳を明確に確認できる例が少なく、人骨と犬の遺存体の共伴関係を明らかにすることは容易ではない。7号人骨の墓墳の中で2個体の犬の遺存体（5号犬、5号B犬）が出土した例と、1号人骨の墓墳の中で8号犬が共伴した場合のみ确实であり、6号犬の場合墓墳は确实ではないが近接程度を見て12号人骨と共伴すると推定される。このほか多数の犬の遺存体が入骨の埋葬された近隣で発見され、総13個体の犬が人間の墓と関連して埋められたと推定される。

埋葬犬の大きさは、小級が1個体、中小級が10個体、中級が7個体、中大級が4個体、大級が1個体で、不明が5個体である。

一つの遺跡で上に示した小級～大級の5タイプ全部が出土したことは韓国にも日本にも例がない。時代的にはほぼ並行関係である日本の原の辻遺跡と比べ、中級以上の犬が非常に多いのが特徴である。頭蓋骨の形を見ると、3～4種以上の犬が勒島遺跡に入ってきたと考えられる。

で学生によって提示された代表仮説と班の構成は次である。

仮説	ペット説	番犬説	狩猟犬説	牧畜犬説	墓守犬説
班	1班	2・3班	4班	5班	6・7・8班

6～8班は「墓守犬」と言う仮説は同一だったが、6班は「亡くした人を幽霊なものから守る犬」、7班は「墓を守る犬」、8班は「死後の世界で死者を守る犬」として、具体的な仮説により犬の役割が少しずつ異なった。仮説の特徴を見ると「犬の役割」に対する認識によって大きく二つに分けられる。1～5班は生前の犬の役割に注目し、6～8班は死後の犬の役割に注目している。学生の根拠について、生前の役割に注目した1～5班の中で1～4班は「人間と一緒に埋められたのは、人間に近い存在であった」という前提からその役割を推論している。1班は埋葬犬一覧を利用して性別と年齢、大きさが一定していないことを根拠に挙げている。対して、2～4班は人と近くに埋葬された犬の性別と年齢に集中して、彼らはすべてが大人のオスだから特定の役割があったと仮定している。1班

と3班は貿易港という勒島の時代的な特徴を犬の役割と関連づけており、5班は当時鹿肉の長期保存が大変だったので生きてそのまま管理する牧畜が必要だったという時代的条件を考慮している。このように生前の役割に注目した班は、犬についての情報に加えて、島自体の情報を犬の役割と接続させようとする努力を見せている。したがって、これらの班が受けた批判・質問は「勒島には外部の敵がない」「勒島は牧畜や狩猟が行われなかった」などの島に関するものが多かった。

死後の役割に注目した6～8班は人間と同じ地域に埋められた犬が成犬のオスであったという点と、埋葬する風習で宗教的意味があることを主張した。特に8班は勒島で占いが行われたという事実に基づいて、死後観・来生観が存在したことを具体的な根拠に挙げている。これらの班は人間と犬が同時に埋葬されたことを前提にしており、生前の役割を考慮していないため、この部分についての批判・質問を後に受けた。

最終投票の結果は次の通りである。

班	1	2	3	4	5	6	7	8
	ペット	番犬A	番犬B	狩猟犬	牧畜犬	墓守犬A	墓守犬B	墓守犬C
得票数	2	3	7	4	0	0	0	14

ペット説から番犬B説、墓守犬C説に一人ずつ移動し、狩猟犬説は全員元仮説を維持した。牧畜犬説は全員番犬B説に移動したが、牧畜犬の役割に番犬の役割をある程度含んでいたこと、鹿の飼育が現代にも難しいという反論で番犬説に移動したようである。番犬説の中でもB説を選んだのは自由討論の時に番犬B説の班員が上手く質問に答えたからだと考えられる。6～8班全員は基本的に墓守犬説から変わらなかったが、多くが8班に投票したことが特筆すべき点である。8班で主張する仮説が6・7班での犬の役割をよく具体化していたことがその理由であろう。

(2) 学生の思考分析

授業が学習者の思考活動の促進にどのような影響を及ぼしたのかを調べるために、以下では、学生の思考変化について分析する。生徒が高次元的な歴史的思考をしたと判断した基準は次の4つである。具体的な根拠、2つ以上の資料を活用しての主張根拠の提示、時代状況に基づく判断、主張と根拠の論理的な表現である。

① 最初の仮説から変化した例

この学生は元仮説をペット説にして最終仮説を墓守犬説にした。

(仮説設定紙)

この犬はペットである。埋葬されている犬は多様であり、特にその法則性が見出せなかったため、現代の感覚に近い仮説を立てた。

(班協議録)

人間の墓地の周辺や内部にいたことから、人間に近い存在だと考えられる。長い年月を過ごしている証として、共に埋葬されている成犬がいる。メスと子犬と一緒に埋葬されているから、犬が大事にされていたのではない。サイズがばらけているので、単一の目的に使われていたのではない。種類もばらけているのは貿易によるもの。中国や日本からの貿易の過程で、そういった文化が入ってきたのではないか

(最終的な考え)

多彩なサイズの犬が埋葬されており、特に犬の法則性のようなものは見つけられなかったため、現代の感覚からして最も一般的であると思われるペットという仮説を立てた。しかしオスの成犬をわざわざ殺して副葬しているという指摘、また占いや死後観とういった呪術的な考え方の存在の可能性までとすれば、死後の世界で死者を守る犬の方が時代に則していると考えたため、仮説が変化した。

学生の元仮説は勒島遺跡C地区で発見された犬全体の特徴を基に、犬の多様性と無法則性を根拠にして現代の視点からペットという結論に達している。これは学生本人が持っていた現代の一般的な「犬」の知識に基づいて形成された仮説である。班協議紙でも犬の多様性を根拠にしており、多様性の要素を性別、年齢、大きさ、犬種に細分化して根拠をより具体化していることがわかる。加えて、中国や日本との貿易関係を根拠としたことから、班の協議過程で犬関連資料のみ使用したことからの脱し、より広い視野で根拠を見つめている。最終的に学生は墓守犬説に変化し、その根拠で「オスの成犬」「死後世界観という呪術的思考の存在」を挙げている。この2つの要素は本人が仮説を立てる時は発見できなかった要素である。犬全体では法則性を見つげにくい、人間と近くに埋葬された犬は法則が存在することを理解している。また「呪術的思考が存在した当時の人々」の思考を想像して、現代人の視点ではなく過去の時代状況を考慮しながら判断している。このように根拠を具体化し、それを見つける範囲を広げ、資料を解釈する見方が変化し、当時の人の視点から想像してみようという歴史の中で使用される探求力と想像力が発揮されたことが確認できる。

② 最初の仮説を維持した例

以下は、元仮説を最後まで維持した学生の文章であり、両方とも番犬説であった。

(仮説設定紙)

この犬は鹿といった動物飼う人間を守る番犬の役割を果たしていると考えられる。発見された全陸上哺乳類動物の多くは鹿であり、それは外部からわざわざ搬入されたものであるため、何らかの関係性が考えられる。埋葬された犬の多くがオスであることを考慮する必要があるが、犬の生態に詳しくないため詳細は分からない。

(班協議録)

貿易に従事していた人々が一緒に埋められている。外部から多種の動物が出されている(家畜管理)オスが多い、また比較的大型犬が多いという点から、犬自身の力を重視した治安維持的役割を果たした。人骨1体につき犬1頭が埋められていることで、現地の人々と近い距離だったと判断した。以上から犬は人間の近い距離にいて、人間と共に仕事のパートナーとして働いた番犬だ。

(活動整理紙)

墓守犬はもっともらしい考察ではあるが、なぜ墓守犬としての役割を任されるようになったのかが重要であると考え、生前の役割を断定していない6～8班の意見には賛成できず、また根拠として「宗教的」というあいまいなものを挙げていることには納得がいかない。8班のAの根拠である「他地域にもある」というものも具体性に欠け、根拠として薄い。番犬以外にも牧畜犬などの役割が挙げられるが、鹿肉をどのような形で調達したのかわからないため、賛同しかねる。

学生の元仮説は、鹿に関する資料に繋げようとしている。しかし、「何らかの関係性が考えられる」に留まったり、出土した犬がオスという特徴を使用しようとしたりしたが「考慮する必要があるが、犬の生態に詳しくないため詳細は分からない」と書いている。班協議録を見ると「外部から多種の動物が出されている(家畜管理)」「オスが多い、また比較的大型犬が多いという点から、犬自身の力を重視した治安維持的役割を果たした」などの根拠が提示されており、学生が個人仮説段階では曖昧に説明した根拠が班の協議を通じて具体化されたことが確認できる。このような具体化の過程があったからか、最終的には墓守犬説ではなく、番犬説を選んだ。活動整理紙を見ると、墓守犬が最も適切に見えるが墓守犬になった生前の役割についての説明が必要であると強調している。「宗教的」という言葉だけでは根拠があまりに曖昧であるとも指摘している。このように、説明不足であった最初の自分の仮説を班内協議と班間議論を通じて徐々に強化しながら、学生は比較・批判・検証・判断などの高次思考活動をしたことが分かる。

③ 最初の仮説を維持したが、類似した仮説に移動した例

次の学生も元仮説と最終仮説は墓守犬説で変わらなかった。ただ最終投票で本人の7班(墓を守る犬)に投票せず8班(死後の世界で死者を守る犬)に投票した。

(仮説設定紙)

この犬は人間が死んだ際の副葬品(お供)のような役割で会った。上の写真は自然ではなく並べられたかのように思われるため。鹿占いがあったならば宗教的な考えがあったのかもしれないから死後を想定して埋葬された可能性がある。

(班協議録)

墓がc地区に集中しているので、c地区に埋葬された人は特別な人だ。埋葬されたのが全部オスだから宗教的な意味が込められてそう。何で一緒に埋葬したのかが重要だと思う。

(活動整理紙)

あまり変化しなかった。占いから見られる宗教的考えから、死後に犬の役割を重く置いていたと思ったから。ただ、犬が利口で忠実な性質も考慮すると、死後に死者を守るような役割だったのではないだろうかという風な考えに少し変わった。あとは、他の仮説では決め手がなかった。

学生の元仮説は鹿の骨で占いをした靺鞨人の文化に焦点を置いて、犬の埋葬も宗教的意味を持つ行為とみなした。学生のいう「副葬品の犬」が実際どのような意味を持つのかは学生の元仮説には正確に表れていないが、7班の班協議紙に書かれた「墓を守る犬」という仮説を通じて推測できる。班協議録にはすべての犬がオスだった点も根拠として追加され、「C地区に埋葬された人は特別な人だ」という推測も提示されているが、根拠が足りなかったのか討論中には出てこなかった。活動整理紙を見ると「忠実」という犬の特徴を考慮しているが、これは「宗教的意味で犬を埋め込んだ」からもう一歩踏み込んだ「複数の動物の中でなぜ犬だったのか」に悩んだ結果である。これにより、副葬品としての犬の意味をよく活かした8班(死後の世界で死者を守る犬)の仮説を選択した。このように学生が同じ墓守犬説内でも討論を通じて違いを発見し仮説を改善しているという点で、深い思考活動をしていることを確認できる。

おわりに

本稿は、加藤の解釈授業を使って韓国靺鞨遺跡の犬に関する教材を開発し、学生の思考の変化を明らかにしたものである。討論の場面において、それぞれの立場から大学生は各自の思考を資料に基づいて推測し、班別協議や他班からの意見を聞くことで、より解釈を深める活動をおこなっていることがわかった。この活動を通じて、学生は歴史的事実を推理する過程を学ぶという点、過去の人の観点からその時代を理解するという点、1つの歴史的事実が多様な意見を発生させる点などを楽しみながら学んだ。こうした学習を行った学生は歴史の性格を知り、他の史実を見るときも歴史的思考を活性化させる可能性が高まるのではないかと推測される。今回は大学生を対象としたが、この情報を基礎に今後は歴史的思考力の段階を設定して、高校生の発問や資料選定、展開を考える必要がある。

註

- 1) 以下, 2節の勒島遺跡に関して, 李俊貞 (2013), 井上主税 (2010), 金相賢 (2009), 国立晋州博物館 (2016ab), 東亜大学博物館 (2008) の資料を参照した。
- 2) 勒島で出土した人工遺物は土器がほとんどであり, 土器のほとんどは三角形粘土帯土器を標識とする時期の土器である。粘土帯土器は口縁部に粘土でできた帯を付いた

土器で, 三角形点土器は南海岸地域で集中的に確認されている。

- 3) 28個体の犬の遺存体の中で, 21個体は人骨と同一あるいは隣接する層から発見された反面, 残りの7個体は層を異にしており, 人骨と直接的な関連性を知るのは難しいので含まれていない。

参考文献

- 李俊貞 (2013) 「韓半島の遺跡出土飼育種犬の活用様相」『韓国上古史学報』第81号。
- 井上主税 (2010) 「勒島遺跡と対外交流」『季刊考古学』, 52頁。
- 内山幸子 (2014) 『犬の考古学』同成社。
- 加藤公明 (1991) 『わくわく論争! 考える日本史授業—教室から「暗記」と「正答」が消えた』地歴社。
- 加藤公明 (2000) 『日本史討論授業のすすめ方』日本書籍, 43-57頁。
- 加藤公明・和田悠編 (2012) 『新しい歴史教育のパラダイムを拓く—徹底分析! 加藤公明「考える日本史」授業』地歴社。
- 加藤公明 (2015) 『考える日本史授業4: 歴史を知り, 歴史に学ぶ! 今求められる《討論する歴史授業》』地歴社。
- 金相賢 (2009) 『韓国古代葬制の変遷に関する研究』東国大学仏教文化大学院修士論文。
- 九州歴史資料館展 (2001) 「九州歴史資料館展示解説シート」(2017/12/11 アクセス済)
- 権五鉉 (2013a) 「가토 기미야키의 토론 수업 유형에 대한 분석과 평가」(加藤公明の討論授業の類型に関する分析と評価) 『역사교육논집』。
- 権五鉉 (2013b) 「주체적 역사 인식을 육성하기 위한 가토 기미야키의 토론 수업 연구」(主体的歴史認識を育成する加藤公明の討論授業研究) 『사회과교육연구』。
- 国立晋州博物館 (2016a) 『国際貿易港勒島と原の辻』。
- 国立晋州博物館 (2016b) 『勒島と原の辻から見る東アジアの交流様相』。
- 児玉康弘 (2005) 『中等歴史教育内容開発研究—開かれた解釈学習—』風間書房。
- 東亜大学博物館 (2008) 『泗川勒島C2』古跡調査報告書。
- デジタル濟州市文化大典 http://jeju.grandculture.net/Contents?local=jeju&%20dataType=01&contents_id=GC00701764 (2017/12/8 アクセス済)
- 寺尾健夫 (2005) 「社会的理解の方法を媒介にした出来事の解釈学習」『社会系教科教育学研究』17号。
- 土屋武志 (2015) 『実践から学ぶ解釈型歴史学習—子どもが考える歴史学習へのアプローチ—』梓出版社。
- 土屋武志 (2016) 『解釈型歴史学習のすすめ—対話を重視した社会科歴史—』梓出版社。
- 戸田善治 (2006) 「社会科における歴史認識の育成」日本社会科教育学会『新時代を拓く社会科の挑戦』第一学習社。
- 原田智仁 (2009) 「中等歴史教育における解釈学習の可能性: マカレヴィ, バナムの歴史学習論を手がかりに」『社会科研究』70号。
- 益満義裕 (2004) 「イヌから見た中国古代の社会と文化」『東洋文化研究』6号。